

ユネスコ主催気候変動教育に関する国際セミナーに参加して

不二聖心女子学院中学校・高等学校 教諭 中山 駿

2015年12月7日～8日にかけて、フランス・パリにある国際連合教育科学文化機関（UNESCO）の本部で行われた、気候変動教育に関する国際セミナー（UNESCO international seminar ‘Getting climate-ready: ASPnet schools’ response to climate change’）に参加した。11月末から気候変動枠組み条約第21回締約国会議（COP21）が開催されており、UNESCOも、これに合わせて今回のセミナーを企画した。



ユネスコ本部前にて日本の参加者と

不二聖心女子学院は、ユネスコスクール（ASPnet加盟校）として認定されている。日本全国には約1000のユネスコスクールが存在するが、「国際理解」や「世界遺産」などをテーマとする教育活動に取り組む学校は多いものの、「気候変動」に取り組んでいる学校は、まだ少ないのが現状である。不二聖心では、高校1年生の総合学習の時間での森林に関する環境学習を軸として、気候変動教育に取り組んでいる。その取り組みが評価され、今回、日本のユネスコスクールの代表として、ユネスコよりこのセミナーに招待された。日本からは全部で6校が招待され、不二聖心は唯一の私立学校であった。

セミナーには全11か国・55のユネスコスクールが参加した。公式言語は英語とフランス語だ。学校によっては生徒も招待されている所もあり、どの生徒もまだ15～18歳ながら、壇上に立ったり、挙手をしたりして、各国の大人たちに対して積極的に発言していた。アジア・太平洋地域からは、インドネシアの学校の生徒が招待されていた。

本セミナーの目的は、次の2点だ。1つは、気候変動教育・持続可能な開発のための教育（ESD）について、実践例を紹介したり、あるべき姿について意見交換をしたりすること。もう1つは、これらの実践をサポートするためのガイドブック（Sustainable and Climate-Friendly Schools-A Teacher’s Guide to Taking Action）への提言だ。今回のセミナーでの議論の成果をふまえて、このガイドブックは近日発刊される予定である（インターネットからでもダウンロード可能）。



1日目のセミナーの様子



2日目のワーキンググループにて

セミナーは2日間に渡って開催された。1日目は、気候変動教育や、聖心女子大学の永田佳之教授をはじめとする持続可能な開発のための教育（ESD）の専門家が壇上に上がり、司会をしつつ目指すべき教育の在り方について提言し、参加者もそれに対して発言しながら意見共有を行った。2日目は、日本を含む5か国の学校の取り組みの実践例を紹介し、その後小さなグループに分かれ、それぞれ設定されたテーマに沿って意見をシェアし、ガイドブックへの提言を行った。不二聖心が参加した

グループのテーマは「持続可能な学校施設やキャンパスは、どのように気候変動に関する教育に貢献するか？」というものであった。不二聖心では、敷地にあるお茶畑を利用して、近隣の小学生と共に中学生がお茶摘みを行い、自然の豊かさを実感する取り組みを行っているという事例を紹介した。

今回のセミナーを通し、印象に残ったことは次の4点だ。1つ目は、気候変動教育への取り組みに対する国による積極性の違いだ。気候変動によって最も深刻な被害を受けることになるのは、最も貧しく、備えが整っていない国々である。会議の中において、積極的に発言を繰り返していたのは、気候変動を自らにとって特に切迫した問題として受け止めている国の先生方が多かった。その姿を目の当たりにした時、日本の教育現場における気候変動問題への取り組みは、まだまだ不十分であり、のんびり構えすぎている、という思いを抱かざるを得なかった。



セネガルの学校の先生と生徒と

2つ目は、基本的なインフラストラクチャーの整備水準の違いである。会議のある場面で、優秀な取り組みの事例や、その教材などをインターネットによって共有していきたい、ネット上の共有データベースを構築したい、という意見が出た。その時、ある国から、「私たちの国では、インターネットへの接続環境が十分に整っている学校はまだ少ない。オンラインデータベースを作るのは良いかもしれないが、やはり出版されるものが第一であり、それは今後も大事にしてもらいたい」という声が上がった。日本の教育現場において、インターネットへの接続環境が全く整備されていない学校は、考えにくくなってきているが、それは非常に恵まれた環境なのであり、世界を見渡せばまだまだそこまで到達できていない国・地域も多いのだ、ということを実感した。

3つ目は、実行力である。例えばインドネシアでは、水害によって水田が水没してしまうことを防ぐために、独創的なアイデアを生み出し、実行に移した。それが、「Floating Paddy Field」、*“浮く田んぼ”*である。プラスチック製の樽を土台の下に取り付け、上部には土を広げ、水田を作る。たとえ水害が発生し、水位が上昇しても、それに合わせて水田も共に上昇していくというアイデアだ。机上の空論で終わることなく、教育活動の取り組みとして実際に行動するところにまで持っていくその実行力には驚かされた。

4つ目は、「つながり」である。国内外の学校をつながり、地域との関わり、ボランティア団体やNPOなどとの関わりである。セミナーの最後にも、学校自身が「オープン」であることの大切さが確認された。自分たち自身の活動で終始するのではなく、最終的には地域・社会へとつながっていく。気候変動という問題解決のために、自分たち自身が実際に動き、携わっていく。気候変動に関わらず、子どもたちが自分たちの学びの成果を地域・社会に還元する機会を与えてあげることで、子どもたち自身も学びの意義を改めて認識できるであろうし、やりがいも感じられる。



お世話になった

聖心大の永田先生と

パリ・ユネスコ本部での国際セミナーでは、国内外のユネスコスクールの先生方と交流する機会をいただけた。大きな刺激を受けることのできた2日間であった。この経験を、これからの聖心の教育活動へと活かしていきたい。